

シングル・ノート

SINGLE NOTE

増田みず子

シングル・ノート

SINGLE NOTE

増田みず子

© 1990 Mizuko Masuda
Printed in Japan



増田みず子
シングル・ノート

1990 年 7 月 25 日第一刷印刷
1990 年 8 月 1 日第一刷発行

発行者 兵頭武郎
発行所 株式会社 日本文芸社 〒101 東京都千代田区神田神保町 1-8
電話 東京(03)294-8931 振替 東京8-73081
本文印刷所 図書印刷
カバー・扉印刷所 栗田印刷
製本所 大口製本

定価 1550 円 (本体1505円)
ISBN 4-537-04995-2 C0095
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

SINGLE NOTE

CONTENTS

I

出会い	13
男と女	17
結婚したこととのメリット	23
遊び仲間	35
結婚と小説	38
今の暮らし	40
家庭の可能性	43
馴染めない言葉	55
赤い風船	58
自信たっぷりの方は信用しないに限る	62
好きな男の条件	67
「個性的」な若者	71

II

百花園 83

ぶりおこし 88

隅田川七福神 93

春異変 98

植物気分 103

満開 108

歩く人 113

花のあやしさ 118

季節の変り目 123

魔 128

空き地 133

きっかけ

138

風景が見えない

143

町の風景

146

川の上の道

149

隅田川

152

ベランダの林

155

私の雛人形

159

ヒマラヤ

163

III

手紙の返事

171

名前

176

匂いガラス

179

欲しいもの

183

小説とエイズ	229
進化	225
エイズの来歴	221
ウィルスとのつきあい	217
みんなの科学	214
みんなの数学	211
新モダン・タイムス	208
すいかの廃棄率	206
そばとアイスクリーム	201
お馬さま	196
暴走自転車	192
マグカップ	189

IV

文庫とのつきあい 235

本 239

耳にしみる眩き 辻章『逆羽』

244

『アフリカの日々』 248

今年の3冊 250

本好き 252

『非言非黙』 254

初対面の歌たち 265

V

鏡花のこと 金沢のこと 273

津軽平野 277

	『晩年』『人間失格』	285
	悲しい賢治	287
	岡本かの子	294
	小説のきっかけ	297
	遊びと小説	300
	冒険すぎ	305
	私の文章修業	312
	小説を書いてみませんか	315
あとがき		319
初出一覧		322

裝
幀
菊
地
信
義

シングル・ノート

I

出会い

『シングル』について、私にも一応意見らしきものはあるが、それが人の参考になるとはあまり思わない。私の意見は私の体験の範囲内から出て、その体験は私だけのものだからだ。その意味で、人はあくまでもシングルの存在だと思っている。

『シングル・セル』という小説を書いたのはもうずっと昔のことのような気がするのに、その後、シングルの時代などという言葉が流行したおかげで、いつまでもつきまとわれている印象がある。小説そのものより、シングルという言葉にある。あるいは、これを訳した「孤細胞」などという言葉に。

シングルと称する人々が増えてきた。女も男も一人暮らしをする人が珍しくはなくなった。シングルの言葉の定義は実にあいまいなままではあるにしても。

増えれば、あとから条件が整ってくる。一人暮らしが精神的にも物質的にもしやすくなるのは歓迎すべき現象だと思っている。自分がしたいことをするのに人眼を気にしなくてす

むというのは、何でもなしのことのようにだが大変重要なことで、ありがたい傾向である。

もっとも、実をいうと私は二年ほど前からシングルから足を洗ってダブルの生活をしているから、シングルの味方をする気はないけれども。それにしたって私はなにもシングルにいやがさしてダブルに切り替えたわけではない。シングルのときも、ごく自然であたりまえの暮しだと思っていた。ダブルになってからも自然な暮しだと思って毎日すごしている。将来のことはどうなるかわからないが、どちらにしても、自分が自然であたりまえと思える暮ししかないだろうという気がする。

自然であたりまえの暮しというのは、むしろ私の実感でしかない。言葉で説明しろといわれても困る。人によって違うとしかいえない。頭で考えることではなく体験するものだからだ。体験してはじめてそれが自然であたりまえの暮しだとわかる。わかるまではわからない。自分だけの問題である。

私は、人は本来シングルの存在だと思って、それを前提にした暮しをしてきた。今もそれはかわらない。自分のことだけを考えて生きていくよりしかたがないのだ。人のことはわからない。だから、一生シングルとして暮すつもりをしていればいい。それが一番自然な姿だと私は思う。

異性はそういう自分の前に、ある日突然UFOのごとく出現する。まさに、未知との遭遇である。むしろ、一生遭遇しない場合もある。人は大抵、無理にでも遭遇をでっちあげ